

ゆたかなる春の恵もくれなゐの深き色香の花に見ゆらめ
國津風をさまる春の色もげに香にあらはるゝ梅のはつ花

一、月前餞別

三月七日夕過康征之亭月照庭際戯に餞別の意を。

限りありて春に別るゝ花も根に歸るをたのむ今日の暮かな
聊思ふよしありて也。且亭主人筒花生に花は不生して、

此句をつけられたるまゝ、其裏に書付し也。

我も世に生る甲斐あり花の友

一、久丸公子誕生の賀

五月公子久丸誕生の賀。

今日よりはなほ喜びを加ふなる國の榮えも一しほにして
つきせじな國とみ民もやすくして君をぞあふぐ萬代の聲

一、公儀役人黜陟常なき事

此頃山内大膳亮殿を、若年寄役被命候の處、五月十一日御

役被召放候。其間只八日なり。又去年か御奏者番三浦壹岐
殿、若年寄役に被命候處、是も近頃御役被召上本職被仰付
候。喜多見若狭守殿は無雙の出頭、最前七百石の祿に候處、
二萬石迄御加増にて、牧野備前守殿扱は喜多見殿と申程に

候處、當春御勘氣果て松平越中守殿へ永御預け成、勢州桑
名城下へ被遣候。是等に不限御側御奉公の衆、無幾程御役
被召放候儀度々に及候。當時御役人衆安堵無之旨風聞す。

最前御書院番頭松平但馬守殿、去冬御側衆に被命安房守と
改稱候。昨十一日四千石御加秩にて一萬石に成り、若年寄役
被仰付候。是も又如何と申様に候。稻垣安藝守殿、齋藤飛驒

守殿も、當春御役被召放候。か様の度々に、各親類中迄も
出仕等遠慮被仰付候事。飛驒高山城主金森出雲守賴時も、
去頃奥御談衆に被命、五月十三日猶更御近習の御奉公被仰

付、柳澤出羽守並と申事也。十五日戸田城州へ御使者被遣
候刻、御返答の内に出雲守殿の儀は御並違申候條、御勤の

儀御無用に候。若又公儀向押立候儀にて、御勤可有之品候
はゞ、山城守殿迄御伺可有之旨被仰越候。

一、宗近作の脇差

十八日堀部養叔、小鍛冶宗近作脇差獻上す。是は元來從太
閻秀吉公、備前上様へ被進候處、備前上様伊田秀宗
御御籠中被召使候
内官の朝鮮人左京と云者へ被下候を、左京儀養叔弟養佐を
養子の約束いたし、件の脇差を授申候。當時養佐子養壽爲

家珍候。内々多賀信濃に附て獻之。

一、傳太の太刀と小鍛冶の長刀

傳太の御太刀、節姫様へ爲御守御側に被指置候の處、久丸
様爲御守護金澤へ可被遣旨、十九日右御太刀と小鍛冶御脇
指と被取替。且又小鍛冶の御長刀、豊姫様、慶姫様御守護
に、金谷の御亭に被指置候。是又久丸様御守に被遣候に付、
替の御道具の事今日本阿彌光山へ御尋候處、三池可然旨申
上候。三池の御道具猶三腰御土藏に有之由。傳太の御太刀、
小鍛冶の御長刀を本阿彌拭候時分は、潔齋仕候由也。如此
の類猶有之や御尋の處に、公方より本阿彌家へ代々御預の
鬼丸の御太刀、又は禁裏に號壺切御劍有之候。是等拭候時
分も潔齋仕候。已上四振の外は無御座候由。

一、山崎半左衛門、伊達家に使す

六月朔日松平陸奥守殿より、初て御使者家老柴田内蔵允被
遣候。口狀は、今朝は於御城得御意珍重存候。伊達遠江守
へも被入御念、被仰聞候趣致承知候。内々丹後守へも申聞
置候。御序も有之候はゞ、得御意度存たる處に御座候。尤
致同公御禮可申入候得共、御普請御用に付不能其儀候。依

六月二日久丸様御天死の儀、御訃音を聞きて。